

「沈黙」を考える

<その1>

先日配布された「沈黙は患者さんからのメッセージ 沈黙から思いを汲む看護ー」（広島県立広島皆実高校 衛生看護科3年 有本遙奈さん）を読んで「沈黙」のことを考えました。特に眼を引いたのは次の様な言葉でした。

「私は沈黙が苦手だった。患者さんのベッドサイドに行き、会話が途切れてしまい沈黙が訪れると、『患者さんのことを知りたい』『私のことを知ってほしい』という思いも、何も伝えられないように感じるからだ。」

有本さんは清拭をする際に目にした「パジャマの痕と搔いた痕の背中赤さ」からこれまでの看護を振り返って「沈黙」を捉え直しています。

「以前の私は会話が続かないと、コミュニケーションが途切れたように感じ、『何か話をしなければ』と焦りを感じた。しかし、沈黙の間にも患者さんからの訴えがあり、その大切さを学んだ今では、患者さんからどのようなメッセージが送られているかを考えている。」

有本さんの患者の無言の訴えを必死につかもうとする姿勢に私は深く感動しました。そして以前読んだ川嶋みどりさんの1冊の本を思い出しました。

川嶋さんは『看護の危機と未来』（2009年）のなかで、看護の危機の一つとして「患者の訴えよりもデータ重視の風潮」をあげています。

「そんなふうに、最終的には**患者に触れなくなってしまう**。直接手を触れず、機械越しにしか触らない、『本当にそれで看護といえるの？画面上の選択肢でアセスメントをしてそれでいいの？』と、こういった状況すべてを私は危機的状況と言いたいのです。」

私は持病の治療のため定期的に病院に通っていますが、川嶋さんが「危機」ととらえた事を実感していました。以前は医師が聴診器を胸や背中にあてたり、リンパ腺の異常がないか手や首のあたりを触ったりすることが普通でした。それが今では血液検査の数値だけであれこれ診断されます。聴診や触診すらなくなっている医療現場が多くなっているなかで、「沈黙」の意味を考え、患者の無言のメッセージをつかもうとする有本さんのような看護学生の成長が危機を乗り越える希望の灯になってほしいと思います。

<その2>

「沈黙」に耐えられないという感覚は、大学で学生の研究指導をする時に私はながらく持っていました。例えば、ゼミで一人の学生がレポートを終え、質問や意見が出されて議論が白熱するといった経験を持つ私には質問も意見も出ない「沈黙」が耐えられませんでした。そうするとついつい私が質問や意見の口火を切ってしまうことが多くありました。また、議論がなくなると私の意見を長々と言う事もよくありました。C.フレネが批判した「教師のおしゃべり病」患者だったわけです。

フレネ教育を勉強し始めてから何とか「教師のおしゃべり病」を治療しようと思い、コメントは短く的確にすること、「沈黙」に耐えることを努力しました。「沈黙」が15分続いても学生が発言するまで待ちました。最初のうちは待つ事が苦痛でしたが、「佐藤はこういう人間なのだ」と分かってくると学生の方から重い口を開くようになります。ゼミが終わってからの食事会や飲み会での「バカ話」を含めて、「ゼミづくり」がうまくできた学年は卒業研究でも就職でも好成績をあげました。飲み会で冗談まじりに「関西の教師は、職員会議でもHRでも

オチを考えてから発言するんやで。」と話したことを、大阪の教員採用試験を受けた学生が思いだしたそうです。面接官が「教員になるに際して何か不安なことはありますか？」と質問したので、「教授からオチを考えて発言するのが関西では必要と言われ、私にできるかどうか不安です。」と答えたら3人の面接官がそろって「ひえ～」と身振り付きで反応したそうです。さすが大阪ですね。その学生は無事合格しましたが、同時に合格した名古屋市で現在も教師をしています。

懐かしい人との再会

5月19～20日、鹿児島で開かれた「地域民主教育全国交流研究会・2018 鹿児島集会準備集会」に行って来ました。セントレアから初めて体験するプロペラ機で鹿児島空港へ。空港も



鹿児島市内も「西郷どん」一色でした。

準備集会で分科会毎の打ち合わせが始まった時、現地の担当者が見覚えのある顔だったのですが、何と2014年の探究基礎「ソクラテスミーティング」でアスネットから来ていた米蔵雄大さんでした。

この時のミーティングで「今の目標は？」という生徒からの質問に米蔵さんは次の様に答えていました。

「35歳までに鹿児島に戻って新しい団体を作ること。鹿児島は全然仕事をする所がなく、勉強すれば勉強するほど県外に出て行く若者が多い。地域に残ってもらえるような仕事がしたい。」

この言葉どおり、「一般社団法人 folklore forest」を立ち上げその代表理事として活動されています。活動の内容まで詳しく聞く時間はなかったのですが、その後分科会について話し合ったことをきっちりまとめてメールで送ってくれました。

11月23～25日に開催される本集会には鹿児島の様々な市民団体が集まり、全国の教師達と論議を深めます。私に関心がある子ども食堂の活動も活発なようで今から楽しみです。ただ、「西郷どん」効果か今回乗ったプロペラ機（70人乗り）は時間によってはすでに満席です。ホテルも強気の価格設定のところが多く、全国からの参加者も苦労しそうです。

知覧特攻平和会館にて

一度は訪れたいと思っていたこの会館に滋賀の友人と共に行きました。知覧から特攻機で出陣した兵士は17～22歳が大半ですが、なかには33歳の方もみえて驚きました。まだ幼い2人の娘が字を覚えたら読めるようにと全文片仮名で記した遺書もありました。知覧から出陣して逝った千名を超える兵士の内、東京、鹿児島に次いで愛知が3番目だったというのも初めて知りました。出陣前の数日間を過ごした



「三角兵舎」(三角形の屋根だけ地上に出ている半地下式の兵舎)も会館脇に復元されています。この狭い兵舎で遺書をしたため、毛布をかぶって忍び泣いた兵士もいたそうです。修学旅行

で訪れた生徒達の折り鶴が平和への祈りを伝えています。



